

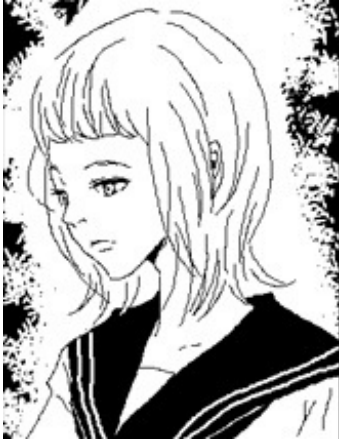


月のヒカリ

II

著：モカ

絵：Nanaha



Konoha Hikari  
木ノ葉 ヒカリ

高校2年生になったばかりで、性格は真面目で明るい性格、弓道が得意。

2年前父親が再婚し家族が増え今は両親と兄との4人暮らしだがヒカリは家族に馴染めずいつも孤独を感じている。

学校の弓道場で矢を放ったさいに不思議な光に導かれ異世界セブンズドアに迷い込む。



Getuka  
月下

髪の色は黒で少し幼さが残る顔に緋色の瞳がとても印象的な龍神人の青年。

闇を抑える不思議な力を持っている。

ヒカリの前では冷たく接しているがいつも気に掛けている。



Zin  
ジン

とても元気で明るい少年。

ラオスの兵士で、ユーリスとの国境を監視する城の副官をしている。ある事件を切っ掛けにヒカりに命を救われヒカリと行動を共にすることに・・・。

## 闇の見る夢

---

ヒカリは闇の中にいた。

『ここはどこ？お父さん、夜月先輩！！  
みんな私の前から居なくなる、私は独りなんだ・・・』

闇のなかにいるせいか気持ちが沈み体がだるい。

ポタポタ

とどこからともなく音が聞こえてくる。

『何の音？』

ヒカリが異変に気づき足元を見ると赤い液体が湧き出し水溜りをつくり、赤い血の海から生気が無い人の頭が浮き上がってくる。

『違う、私じゃない！！私じゃないわよ！！イヤーこないで————！！』

ヒカリはその光景を見て悲惨な城でのできごとを思い出し、その場から逃げ出した。

『違う・・・違うの！？』

頭が混乱し何も考えることが出来ない、ヒカリが闇の中を走っていると暗い闇の中に一つだけ明かりが灯っている。

『何に！？』

ヒカリは不思議に思ったが闇の中にいるせいか、光にすいよせられるように光に近づいてゆく、

光の中に入るとそこには見たこともない見事な庭が広がっていた。  
日本庭園とは違うが少し似た感じがするととても広い庭に赤い柱が印象的な立派な建物が立っていた。

『ここはどこ？』

ヒカリは急に現れた庭や建物に困惑する。

「何てことだ！！」

屋敷の奥から低い男性の声がする、ヒカリが恐る恐る屋敷の奥を覗くと、夫婦らしい二人の男女が寄り添い何かを眺めている。

良く見ると彼らの前には生まれたばかりの獣の赤ちゃんが寝ていて、きゅきゅと愛らしい声を出している。

「何かの間違いよ！私がこんな獣を産むはずがないわ！！」

妻が取り乱しながら夫にしがみつくと、そんな妻の様子を見た夫は

「アン、この子は私たちの子供だよ！！目を背けないで」

夫が妻をなだめるが妻はより一層取り乱す。

「馬鹿なこと言わないで！！こんな獣が私の子供であるはずがないわ、私の赤ちゃんはどこ私の赤ちゃんを返してよ！！！」

夫は泣き叫ぶ妻をどうすることも出来なかった。

「アン・・・・・・・・。」

ドタドタと音を立て屋敷の廊下を走る音がする。

「ハッハッ」

と息を切らしながら赤毛の男の子が凄い勢いでヒカリの方へ走ってくる。

「ジン様お待ち下さい！！」

その後をひと回り大きい男の子が追いかける。

「待てないよムイ！お母様が帰ってくるんだ、お母様！！」

部屋の戸を勢いよく開けるとそこには母の姿はなかった・・・・・・・・。

「はぁはぁ、バァヤ、お母様は！？」

と不安そうに部屋にいた老婆に男の子が尋ねる。

バァヤは顔色ひとつ変えることなく淡々とそっけなく言う。

「アン様は長旅でお疲れになられ休まれていますよ、お静かにジン様」

「そうなのか・・・それじゃあ仕方ないね」

男の子は残念そうな顔をする、今にも泣き出しそうだ。

「ジン様やっと追いつきましたよ、廊下を走られてはいけないと何度言えば分かって頂けるのですか！！」

と男の子を叱る。

「ご免なさいでも、お母様に早く会いたくて」

男の子の様子を見て彼の表情も曇る。

「ジン様……。」

ヒカリは目の前にいる二人を見て

『もしかして、あの赤毛の男の子ジンてあのジンなの？どうして、これは夢?!』

「なぜ、お母様は私に会って下さらないのですか！！お父様」

とジンが父親を問いただす、今度姿を現したジンは背格好がヒカリの知っているジンだった。

「ジン、お前ももう子供じゃない分かるだろ」

と急がしそうに仕事をしながら答えた。

「お母様は私が嫌いなのですね、私が獣人だから……。」

ジンの表情が曇る。

そんなわが子の淋しそうな表情を見て仕事の手を止め父親はあわてて弁解する。

「ジンそんなことはない、ただ受け入れられないだけなのだ、あれは高貴な貴族の娘、哀れな母を許してくれジン……。」

「お父様お願いします、お母様に一目だけでも会いたいのです、また故郷の国に帰ってしまわれるとお聞きしました、お母様に会い話してみたいのです！！」

ジンは父にすがり付き必死に頼む。その様子を見て哀れと思った父親は……。

「ジンあい分かった、お前がそこまでして頼むのなら私からアンに話してみよう、だがこれだけは覚えておいておくれ、お前は私たち夫婦にとってかけがえのない息子であるということを、愛



しているよジン」

『ジンにこんな過去があったなんて以外だ、いつも元気で笑顔がまぶしいぐらいなのにジン可哀想・・・。

やっぱりここはジンの世界なんだでも、この世界の人には私が見えないみたい、ムイさん若いせいかよりいっそう綺麗！！でも、ジンは今と変わらないのね？何でだろう？』

ヒカリはどうすることもできず、自分の目の前で起こる出来事をただ眺めていた。

「ムイ聞いてくれやっとお母様にお会い出来るんだ！！お父様が約束して下さい」

とジンがあの太陽の様にキラキラした笑顔でいった。

ムイは部屋の隅で何か紙に書いていた、手を止め顔を上げる表情は堅い。

「ジン様アン様にお会いするのはお辞め下さい、あのお方は狂っている、これまで何回」

とムイが続きを言おうとするとそれをジンが遮った。

「言うなムイ！！あれは何かの間違いだお母様じゃない。」

ジンの顔色が変わる、その様子を見てムイは……。

「分かりました……。

ジン様あなたの気が済むのならアン様にお会い下さい、ですが私もお供させていただきますどこまでも……。」

と言い終わるとジンを抱きしめる自然とジンの瞳から涙がこぼれ落ちる。

「ありがとう……。」

ジンは声にならない声で囁いた。

「ジン様こちらへ」

女官のようないでたちの女性がジンを呼びに来た。

ジンとムイは女官についていき明かりが灯る部屋に入って行く、なかは薄暗く香が炊かれているせいか異様に甘い匂いが鼻につく。

「お母様？」

薄明かりに一人の女性の姿が見える。

手足は細く色白で髪を頭の後ろに結い上げている、一見可愛らしさが先に立つがその中でも貴族らしい輪とした大人の女性を感じさせる。

ムイは膝枕ずき

「お久しぶりですアン様」

『この人が私のお母様・・・。』

初めて会う母親にどう接していいか分らずジンは呆然と立ちつくす。

「ジン私の可愛いジン・・・。

ご免なさい母が弱いせいであなたにいつも悲しい思いをさせて・・・。」

そお言い終わるとアンは突然ジンに歩み寄り抱きしめる。

「お母様・・・。」

ジンは思いがけず突然の出来事に動くことができずにいた、ジンの表情は母に会え嬉しいという感じではなくただ自分を抱きしめる母をどうしていいかわからず困惑しているようにも見えた。

『良かったねジン、お母さんに会えて私もお母さんにあいたいなあ・・・。

お母さんが亡くなって何年立つだろう？怒ると怖いけどとても優しい人だった・・・。

ジンが羨ましいよ！！』

アンはジンを抱きしめながら服の袖から何かを取り出した、それを握りしめジンの首に勢い良く振り落とす。

「死ねー！！」

さっきジンにかけた声とは違い激しい声で叫ぶ、アンに気を取られ周りが見えないジンは呆然と立ちつくす。

「ジン危ない！！」

とっさにムイが飛び出しアンをジンから突き放しアンを切る、血が辺りに飛び散りジンの顔につく。

アンは体制を崩し床に倒れ込む、ジンは重症の母親に駆け寄らず顔に付いた血をねぐうこともせず、その場に立ったままアンに聞いた。

「なぜなのです？お母様、何故自分の手を汚してまでそんなに私が憎いのですか？知っていました私をあなたが何度も殺そとしていたことは……。

それでも私はあなたを信じたかった、私を生んでくれた人だから」

とジンはさっきとは違い感情をあらわにし叫ぶようにアンに訴えかける

「はあはあはあ……」

と重症を負ったアンは力なく笑った、アンの顔は歪みさっきの美しい女性の姿は無かった、アンは重症を負った人とは思えぬはっきりとした声で。

「ふざけないであなたが私の生んだ子ですって！！私は獣を生んだ覚えはないわ貴族でも地位の高い家の出の私が下等な獣人を生むはずがない何かの間違いよ、私の子供は可愛いアリアだけあなたなんて知らないわ早く私の前から消えて頂戴！！」

アンの声には我が子に対する愛情を感じることはできず、ただ自分のプライドを傷つけられた憎しみがこもっていた。

「お母様……。」

ジンは実の母親から突きつけられた憎しみの言葉に絶望し力なく膝から床に崩れ落ちる。

「暗い……何も見え無い……  
嫌だ！！お母様いかないで私を置いていかないで！！」

ジンが受け入れ難い真実を拒絶し泣き叫ぶ。

「はあはあはあ……」

アンの狂った笑い声がするがすぐに聞こえ無くなった、変に思ったムイがアンの方を見ると。

「旦那さま！？」

アンの側で刀を持ち振り下ろそうとする父親の姿があった、狂ったアンは気づいていないようだった。

ジンが異変に気づき顔を上げる。

「お父様何を！！」

ジンが止めるのも聞かず、父親はアンに止めを刺す、アンは息を引き取った……。

「お母様！！」

ジンは今度は泣き叫び母親にしがみつくと、その様子を見て父親は。

「ジン離れろ！！この女はもうお前の母ではない唯の死人だ！！」

ジンの足元に闇が忍び寄る、ジン以外のものは姿を消し闇は渦を巻きジンを飲み込もうとしている。

『ジン逃げて！！』

ヒカリの声はジンには届かない・・・。

ジンの姿は闇に飲み込まれ消えていった。

「ジン！ジン！」

とヒカリが叫ぶ。

『大丈夫だ心配ない・・・』

と何処からか声が聞こえてくる。

「誰？」

左手が冷たくなりほてった体のせいがとても気持ちがいい。

『こっちだヒカリ、闇に惑わされるな闇の中にもお前なら道を見つけられるはずだ・・・』

ヒカリが上を見ると白い翼の生えた鳥のようなものがヒカリの頭上をぐるぐる飛んでいる。

「鳥？この声はあなたなの？」

ヒカリがそれに気づくとそれはヒカリの側から離れ飛んで行く。

「待って、置いていかないで！！」

ヒカリは必死にそれを追いかけるうちにまた光の中に入ってしまう。

ヒカリが眠る薄暗い部屋に大河が入って来た。

「どうだ月下？」

「悪くない、だいぶ熱も下がってきたようだ」

月下はベッドの横に座り眠るヒカリを見ながら答える。

「お姫様のことじゃないお前の体のことを言ってるんだ、まだ寝ていたほうがいいまた情けなく倒れるきか？」

「仕方ない、俺にしか闇は払えないからな」

「目を覚ましたと聞いて部屋に行ったら姿が見えないからどこに行ったのかと思ったら、お前にしちゃ熱心だなあこのムツリスケベめ」

と薄ら笑いを浮かべながら言う、月下肩がピクピクと震えたと思うと急に立ち上がり大河に詰め寄る。

「おい！大河それはどういう意味だ！！」

大河は後ろに数歩下がりながら。

「まあまあ、冗談が通じない奴だなあ、そう目くじら立てるなよ、それに騒ぐと大事な姫さんが起きちまうぜ」

「うるさい、お前のせいだろうが！！」

「それはそうと月下君」

「話をそらすな！！」

「まあまあ話を聞けよ、城から使いの者が来てなあ手紙を置いて行ったぞ」

「それを早く言え！お前とは付き合いきれん！」

と言い捨てると月下は大河を残し足早に部屋を後にした。

「ムキになっちゃって、まだ子供だなああいつわまあそこが可愛いんだが・・・  
さあこれからどうすっかあなあ」

と大河はヒカリを見ながら呟いた、ヒカンは静かに寝息を立てている。



「今度はなに？眩しい・・・。」

ヒカリが目を開けると見知らぬ天井が見える、側にある窓から日の光が部屋に差し込みヒカリの顔を照らす。

「ここはどこ？」

少し体がだるくびしょり寝汗をかいている、ヒカリは体を起こし側にある窓の外を見た外にはまた見知らぬ景色が広がっていた。

庭らしく池がありその回りには草木がうわっていて小鳥がさえずる。

「はあ・・・。」

とヒカリはため息を付いた。

周りで不思議なことが度々起こるせいで変な免疫が付き自分の身の回りで起こる出来事に驚くことなく受け入れることにしたのだ、じゃないと自分の身が持たないと開き直っていた。

「そうだ！！ジン、ジンはどうなったんだろう？

あの夢も気になる・・・ジンを探さなくちゃ」

ヒカリがベットから立ち上がるとすると足に力が入らず前に倒れそうになる。

「うあ！！」

パフ

ヒカリは堅い床ではなくとても柔らかいものに倒れこんだ。

「何！？痛くないあっあなたはあの時！！」

ヒカリはライラの上に倒れ込んでいた。

「ありがとうライラ！！」

ヒカリはライラにしがみつく。

「あら、元気そうじゃないお嬢さんあなた3日も寝ていたのよ」

一人の女性が部屋にはいって来た手にはお皿らしいもを持っている、お皿からはとてもよい匂いがした。

その匂いにつられてヒカリのお腹が鳴る。

「あっ!？」

ヒカリの顔が真っ赤になった。

「うふふ、体は正直ね。

ヒカリだけ私は綾女よろしくね、何を慌ているのか知らないけどご飯ぐらい食べなさい体がもたないわよ」

綾女(あやめ)は、体のラインが綺麗な赤いドレスを身に纏い長い髪を頭の後ろに束ねている、目元が力強く意志の強い女性であることを感じさせる。

「でも、ジンが危ないんです助けなきゃ!」

ふらつく体でヒカリは立ち上がる。

「強情ねまた倒れても私は知らないわよ」

ヒカリは綾女の横を通り過ぎ部屋から出て行った。

「慌てんぼうな子ね、ジンがいる場所知ってるのかしら？」

綾女は首をかしげた。

「おい、綾女いいのかヒカリは月下様の大事な客人だ叱られるぞ」

と落ち着いた口調でライラが綾女に言う。

「だって！あの子ムカつくんだもん！！月下があんなになって助けたのにジン、ジンで月下も重症だったのよ！！」

と腹を立てる。

「だが彼女は眠っていて月下が倒れたこと知らないだろう？あの子を早く連れ戻さないと月下様に綾女が嫌われるだけだと思うが」

「それを早く言いなさいよ、ライラ連れ戻すわよ！！」

「はいよ」

と二人ともヒカリを追って部屋から出て行った。

ヒカリは屋敷内をさまよっていた。

「出て来たのは良いけどジンはどこ？私のバカさっきの人に聞けば良かった！誰かいないのかな？」

屋敷は広く人の姿はない闇雲に屋敷内を歩き回っていると池のある庭に出た時だった、近くにある部屋から人の話し声が聞こえてくる。

「月下、手紙には何て書いてあったんだ？」

「あの女を早急に城に連れてこいと言うことと城で治療を受けている獣人の容態が悪いらしい」

「キリコ様でも直せないのか・・・」

「その様だな直せるとしたら今眠っているあの女だけだろう、まだ確信は持てないがあいつが試練を乗り越えられればあるいわだが、城に連れて行くのはまだ早い十分体を休め試練に望むべきだ城に文を頼む大河」

「じゃ、あの獣人は助からないな可哀想に」

「仕方ない犠牲は付き物だ」

ガタンと戸が開く音がし勢いよく部屋にヒカリが入ってきた。

「私、城に行きます！！今すぐジンが助かる可能性があるなら！！」

「ひっ姫さん、聞いていたのか！！」

大河がヒカリを見て言った、月下は振り向きもせずに。

「駄目だ、今行っても試練を乗り越えるだけの体力があるとは思えない」

「大丈夫よ私なら、お願いします私ジンを助けたいんです！！」

ヒカリの真剣な表情を見て大河が

「まあ月下やらせてみたらどうだ、遅かれ早けれ試練は受けてもらわないといけないんだ、受けないとごねるやつもいるなか受けたいと本人が言ってくれるなんて有難いじゃないか」

「お前！どっちの味方なんだ、もういい、ダメなものは駄目だ！！」

と月下は立ち上がりヒカリの横を通り出て行こうとする。

「ちょっと待ってよ！なんであなたが勝手に決めるのよ！！」

ヒカリが声をかけても月下は振り返りもしない。

「あっヒカリみ一つけた！！」

ヒカリを追ってきた綾女がヒカリをめがけて走ってくる。

ドン！！

部屋から出てきた月下と綾女が激突し月下が綾女とライラの下敷きになる。

「捕まえた！！あれ月下」

「早くどけよ！！」

月下は綾女の体におしつぶされ身動きができず無意味に手や足をばたつかせる。

「やだ照れちゃって・・・」

月下の嫌がる様子を見てよりいっそう綾女は月下に密着する。

「フゴフゴ・・・」

月下の顔は無残にも綾女におしつぶされ変な声をだしている。

「あの一・・・」

見かねてヒカリが声を掛ける。

「良いんじゃない月下、この子が行くっていったるんだからやらせてみたら」

「綾女姉地獄耳だなあ」

大河が関心する。

「綾女さんありがとう！！私頑張ります」

ヒカリは満面の笑みを浮かべる。

「綾女でいいわよ」

月下を締め上げながら綾女が言った。

「ワァハハ！女の笑顔には勝てないな月下の負けだライラいいよな」

「ああかまわないヒカリがいいなら、おい綾女いい加減にしろ月下様がポックリ行ったらどうする」

ギシギシと月下の体から嫌な音がする。

「はあい」

と言い綾女が月下から離れると月下はグッタリし動かなくなっていた、その様子を見て大河が

「ちょうどいい綾女、月下を部屋に運んでやれまだこいつも本調子じゃないからな俺が言っても聞かんしな」

綾女は月下をひよいと軽々とかつぎ部屋を出て行った。

「綾女さん凄い力持ち！それにライラ喋れるの！！」

「そういやあヒカリの世界では純血しかいないんだったな、よし俺が部屋に送るついでに話してやるよ行こうかオレは大河だよろしくな」

と大河は笑顔でヒカリに言うとヒカリと握手した。

大河の手は大きくてごつごつしているが暖かくヒカリは少しホットした。

大河についてヒカリは歩きだす。

「このセブンズドアの住民はみな人と動物の血が混じった獣人なんだ、だからみな混じった獣の種類や血の量で姿や能力が違う俺たち狼家はオオカミの血を引いている昔は姿・形で差別がひどかったが今はほとんどないみな混血だからな」

「そうなんだ、じゃ私みたいなのは珍しいんですね」

「そうだな、まだ何人かはいるはずだが異世界から来たものぐらいだ」

「私以外にもいるんですか！！」

「たまにヒカリ見たいに迷い込んでくるんだよまあまあれけどな、おっ着いたぜ城に行くのは明日だそれ以上は譲れない、今日はゆっくり休んでくれ細かいことは明日話すからなじゃな」

と手を振り大河は行ってしまった。

『大河ていい人だなあ・・・頼れる兄貴って感じ、それに比べて月下はなんであんなに偉そうで冷たい奴なんだろう、ジン待っててね絶対私があなただけを助けるから・・・』

ヒカリが見上げた空はすっかり日が暮れ星が瞬き月が少し欠けていた。

「遅い!!」

「まあまあ月下女性の仕度は時間がかかるもんだ、そんなんじゃ女出来ないぞ」

「いるかそんなもん！」

月下と大河は、屋敷の門の前でヒカリ達を待っていた。

「おっきたなヒカリ似合うじゃないか」

ヒカリはユーリスの服装に着替えていた。

ラオスとは違い薄い絹のような生地にフンワリスカートのワンピースとっても着心地がよくヒカ  
リはすぐ気に入った、いろんな色や形があり目移りして選ぶのに時間がかかってしまった。

「私のじゃ大きいかと思ったけど大丈夫ね」

綾女がラオスの服は目立つからと自分の服を貸してくれたのだ。

「行くぞ」

と月下がそっけなく言う。

「何だ、ヒカリが可愛いんで照れてるなあ」

大河が茶化すが月下は顔色一つ変えずさっさと歩き出す。

「おいまてよ三太」

月下に大河が声を掛ける。

「三太？」

綾女とヒカリは首をかしげる。

「月下のことだよ、月下が城に出入りしていることが城の奴等に張れると厄介だからな、めんど  
うなことになるから屋敷で待ってろて言うのに行くってきかん、張れないように俺が考えてやっ  
たわけ」

「三太ぶっふふふ・・・」



余りにも単純な名前が月下に不釣り合いだったため綾女とヒカリが思わず吹き出す。

「笑うな！！」

月下が今度は振り返り顔を赤くしている。

「こいつがこの名前じゃないと連れていかないと言うから仕方なくだ！」

と向こうのほうで叫んでいるが3人はそっちのけで三太の話題で盛り上がり聞いていない。

「知るか！」

とぷいっと首をふるると月下はまた歩き出した。

「待てよ三太！」

『以外と可愛い所があるのね・・・』

とヒカリは思った。

ヒカリは月下と大河に挟まれユーリスの町を歩いた、町は活気に溢れ市場にはいろとりどりの野菜や果物が並んでいる、中にはまるで豚のような動物がブーブーいいながら買い手を待っていた。

「うわー凄い大きな市場ね、この首飾り可愛い！」

ヒカリはキョロキョロ市場内を見て回る。

「ヒカリこれ食べてみろよ」

と買い食いしていた大河がヒカリに赤い丸い木の実を手渡す、実を口の中に入れ噛むと甘い果汁が口の中に広がった今まで食べたことがない味だ。

「美味しい！」

とヒカリは頬に手を当てながら満面の笑みを浮かべはしゃぐ。

「だろう！」

ヒカリの反応を見て大河は満足そうに微笑んだ。

「三太も食べるか？小さい時は好物だっただろ」

「お前らなあ少し落ち着けないのか！」

「いいじゃねえかちょっとぐらいなあヒカリ」

とヒカリを味方につけようとする。

「そうよ！ちょっとぐらいいーじゃない」

「お前ら・・・」

と月下が呆れる。

また、サッサと自分だけ先に行ってしまった。

「団体行動が出来ない奴ね！！」

とヒカリは少しムツとした。

大河は、月下と違い明るく楽しいことを沢山知っていて行動力があり親しみやすい人で、側にいるだけで皆を笑顔にする力があつた。

ヒカリも直ぐに打ち解け大河のことが好きになっていた。

「まあまあヒカリ許してやってくれよなあ、あいつ照れてるんだよいわゆるシャイってやつなんだなあ」

「でも、ジンのこともあるし・・・」

ヒカリは月下のことを好きになれないでいた、偉そうな態度やジンのことを見殺しにしようとしていたことがどうしても許せなかったのだ。

「月下のこと嫌わないでやってくれよな、あれはあれでヒカリのこと考えてるんだぜ」

「でも、なんであんなに偉そうなの？大河達の方が年上でしょ」

頭をかきながら大河が続ける。

「まあなあ、なんて言うか俺たち狼家一族は代々月下に使えてるんだいわば月下は主人だな」

「えっ！！そうなの！？月下ていったいくつ？」

『そういえばジンにも見た目で判断するなって言われたっけ・・・』

「見た目どうりの年齢だよ、確か18ぐらいだったかなあ？月下と言う名前も代々受け付がれてるからなあ」

「そうなの・・・」

なぜだかヒカリは少しホットした。

「おっ城が見えて来たぜ、いつ見ても立派な城だなあ、ここにはユーリスの王龍美様がいらっしゃるんだ、俺ら庶民は名前を口にするのも恐れおおいと太下とお呼びしている。太下はこの国が生まれたころから姿・形を変えることなくいらっしゃるそうだ」

「それって歳を取らないでこと？」

「そういうことだなあ、太下は獣でなく神の使いの龍の混血であると言われていたんだ、そそのないようにな」

「なんだかちょっと緊張してきた」

大河のおかげでここまで緊張せずリラックスしてこれたがいざ目の前に迫ってくると身が震える思いがした。

『試練で何をするんだろう？私に出来るだろうか・・・』

急に硬くなったヒカリを見て大河がバンとヒカリの背中を叩く。

「昨日の威勢はどうした！なるようになるってヒカリなら大丈夫さ月下や俺もついてるしな」

「うん！」

とヒカリの声に気合いが入るのを見て、満足げに大河がうんうんと頷く。  
こんな時大河はとても心強かった。

城は大きく搭の上の方は高過ぎて見えなかった、月下は城の門前でヒカリ達を待っていた。

「待たせたな三太」

「遅い！行くぞ日が暮れる」

いつもながら月下はイライラしていた。

「分かってるよ」

「さあ行こうぜヒカリ太下がお待ちかねだ」

ヒカリ達は城の門をくぐった。

城の兵士達は狼家の名前を出すとすぐに道を開けヒカリ達を通す、兵士の様子から狼家はこの国では地位の高い家系であることが分かる。

『大河って偉いんだ！みんな大河を見ると態度が違って見える』

ヒカリは大河を見ながら思った。

「おっヒカリどうした？なにか付いてるか？」

「いえいえ滅相ありません」

「うん??」

ヒカリの態度に大河が首をかしげる。

城のなかはとても綺麗な装飾品や装飾に彩られ夢のなかに迷いこんだ感じで、部屋を何個も通り過ぎるが王がいる部屋になかなかたどり着けないまるで迷路ようだった。

「お！やっと着いたぞ王に会うのも一苦労だな」

大河がゲッソリし装飾に彩られ立派な扉を見ながら言った。

「狼 大河様ですね王がお待ちかねですよ、念のため刃物や武器をお預かりします」

部屋の扉の前に立っていた兵士に月下と大河は刀を手渡した。

「ではどうぞお入り下さい」

と兵士が言うと扉が開く。

「どうぞ」

と言われるがまま三人は部屋に足を踏み入れた。

そこにはずらりとこの国の権力者たちが並んでいる服装、身のこなしから身分が高いのがヒカリでも分かった。

奥には祭壇があり中央の椅子に側近達に囲まれ王らしい人が座っている。

「あれが王様？」

とヒカリが呟く。

「よく来たな狼 大河ご苦労だった」

品があり通る声が響く、眩いばかりの長い金色の髪に容姿端麗な顔立ちこの世のものと思えない美しさだ。

大河と月下は王に跪き頭を下げる、ヒカリは余りにも王が神々しく美しかったため立ち尽くしてしまうが慌ててヒカリも二人に習い跪く。

「よい面を上げよ」

「はっ、有難く存じます」

といつもとは違い真剣な声で大河が言った、三人は顔を上げる。

「堅っくるしい挨拶はよい時間もないしな、久しいな大河後の二人は」

「はっ、私は狼家の三男三太と申します」

と月下が答えると。

クスクスと会場内がざわめく狼家に三男がいたとは初耳だ！！とんだ落ちこぼれなのかも？名前も三男で三太だしな・・・

こんな時に以外な事実が発覚する。

ヒカリと大河は笑いを堪えるので必死だった。

「だから嫌だったんだ」

と月下は下を向きブツブツ言っている。

「でそなたは？」

と王がヒカリに声をかける、すると大河が

「こちらは異世界から来た木ノ葉 ヒカル様です。

ラオスで囚われていたところをキリコ様の命でお連れしたしだいであります」

その場にいた者全てがヒカリに注目する、あれが巫女か？普通の女ではないかなど言いたいことを言っている。

「ほーそなたが純血の人か、時間がないそなたには試練を受けて貰うがよいな」

回りの騒がしさを気にも止めずに王は淡々と事を進める。

「キリコをここえ」

王が言うと奥から身なりの良い老婆が女官を二人連れ姿を現した。

「お呼びですかな太下」

「キリコこの者の名はヒカリ試練を頼む」

キリコは大きな鏡を手に取り王の前に出ると

「ヒカリとやらここえ」

「ヒカリ心配するなあの方はキリコ様この国の司祭様だ、ヒカリに試練を与え下さるそれに俺達も付いてる行ってこい」

前が出るのをちゅうちょするヒカリの背中を大河が押す。

「うん！！」

『そうよ！！こんな所で負けてられないはジンが私を待ってる』

ヒカリアは勇気をだし前が出る。

「娘、よいなこの鏡はペンデの鏡夢の扉じゃ自分の心と向き合い己を知る、自分とはなんなのか見定めてくるのじゃ試練が終わった時お前はこの国いやこの世界の光となるであろう」

「はい！！」

と緊張した声でヒカリアが返事をする。

「ヒカリアとやら期待しているぞ初めよ！！」

と王が言うと鏡が光だすと同時にヒカリアの足元から魔法陣が現れる。  
ヒカリアはフワッと宙に浮いた、身を任せ目を閉じる。

また闇のなかで目を醒ます。

『ここが自分の心のなか？ジンの夢と似ている』



フワッとヒカ리를光が包む。

『何？あれは夜月先輩！お父さんや洋子さんも・・・  
私しこれ知ってる初めて洋子さんを紹介された時の記憶だ』

「ゴホン・・・ヒカリこちらは洋子さんだ、これからお前のお母さんになる人だよ」

と父がヒカリに告げる

「・・・・・・・・」

ヒカリは下を向き黙り込んでしまう。

「仲良くしてねヒカリさん」

洋子はヒカリに声を掛けるが返事は返ってこない。

「おいヒカリ返事をしなさい」

父が声を掛けるが反応はない。

「そんな急に無理ですよ重男さん僕も直ぐには受け入れられなかった、なっ木ノ葉これから仲良くしてくれよな  
そっか！俺ももうじき木ノ葉になるのか改めてよろしくなヒカリ」

ヒカリと違い夜月は落ち着いた様子だった。

ヒカリはこの後も顔を上げることはなかった・・・・・・・・

『どうしてよりもよって夜月先輩のお母さんなのよお父さん・・・  
なんで勝手に決めちゃうの？私だけ蚊帳の外だったわけねサイヤクだ！！  
私は夜月先輩のことが好きなのよ、これから先輩にどう接していけばいいかわからない・・・  
家に私の居場所はなかった皆の和に入るのが嫌だった、そんな自分を夜月先輩に見られるのはも  
っといや！！  
嫌な子てきっと思われてる家に帰りたくない・・・  
私の居場所はどこ？見たくない消えて！！』

ヒカリは頭を押さえ座り込む。  
足元には闇が渦を巻いているヒカリが来るのを待っているかのようだ。  
ヒカリは心を閉じ闇に飲み込まれて行く。

城では月下達がヒカリを見守っていた。

「おい、三太あれ！！」

大河が指した所から闇がヒカリに忍びよる。  
キリコが闇を見て眉を顰める。

「どういうことじゃ、今日は新月闇の力が弱っているはずなのにこの城に闇が入り込む  
とは・・・  
この娘の闇はそれほど深いのかそれとも、皆の者下がれ闇に飲み込まれるぞ！！」

皆が闇を恐れ慌てて後ろに下がる。

「これが闇か！この結界に守られた城に入り込むなどありえん！！」

と王が言う。

「ヒカリ！！」

と叫び月下がヒカリの方へ走っていかうとする。

「待てよ月下お前が闇に食われるぞ！今日は新月だお前の力も弱っている暴走するきか！」

と大河が止める。

「だがヒカリが・・・」

今にも月下は飛び出して行きそうな勢いだ。  
その様子を見ていたキリコが

「ほうお前に何ができると言うのだ月下」

知らないうちに近づいて来ていたキリコに月下が気づく。

「どういう意味だ！」

「キリコ様？」

大河もキリコの異変に気づく、会場にいた他の者達は闇を恐れ離れたせいと騒ぎで聞こえていないようだ。

「この時を待っていた今のお前は武器もなく新月で弱り力が使えない、ここで息子を殺された恨み張らせてもらう」

と憎みがこもった声でキリコが月下に叫ぶ。

「あなたは父上の！！」

「やっと気付いたかこの愚か者め！！そうさ私は相馬の母親だよ、あんたの母親に子供を取られた哀れな老婆さ  
女に騙されたあげくの果てに子供に殺されたなんて相馬が不憫で仕方がないよ！！あんな女を娶ったせいで……。」

とキリコは両手で刃物を持ち興奮している様子だ。

「それは違う！！父上は母上を愛していた二人は幸せだった！！」

「さてよ婆さんあれは月下のせいじゃないだろ、黒龍が暴れたせいだ！！月下に罪はない」

話を聞いていた大河が付け加える。

「うるさい！お前に私の何が分かるって言うんだい可愛い我が子を奪われた気持分かるまい！」

より一層キリコは興奮しゼイゼイと肩で息をしている。

「大河もういい下がっていきな、これは俺の問題だ！！父上と母上を俺が殺したのは事実・・・  
罰を受ける時が来たのかもしれないこいよ婆さん俺は逃げも隠れもしない」

と言うと両手を広げキリコの前に立った。

「月下、馬鹿なことは辞めろ！！」

大河が月下の方へ走り出そうとした時だった、ヒカリの周りに現れた闇の勢いがまし大河の行く手を阻む。

「クソ、月下！！」

「どうした怖じけずいたのか？」

とキリコを月下が挑発する。

「この人殺しが！！」

キリコが勢いにまかせ刃物を前に出し月下に突きつける。

月下は怯む事なくそれを受け入れた。

グサッと月下の脇腹に刃物が突き刺さる、キリコは刃物を抜き取ろうとするが抜けずそのまま後ろに倒れ込んだ。

「はかたな！どこまでこそくなやつなんだ急所をはずしよった」

悔しいそうにキリコが言う。

「月下大丈夫か！！」

大河はなんとか闇から切り抜け月下に駆け寄る。

「大丈夫だそれよりヒカリは・・・」

言葉とは裏腹に苦しそうな声で月下が言う。

「馬鹿な事を・・・闇の勢いがまし姿が見えん」

「そうか・・・」

婆さん済まないな生に執着はないが俺はまだ死ねないやることが残っている、それが終わったらこの命好きなだけくれてやるよ」

と言い立ち上がると脇腹に刺さった刃物を抜きとる。

「うぐう」

嗚咽がもれる。

「何してるんだ出血が酷いすぐ手当を！！」

「言っただろうまだやることがあるって！」

と言い捨てると月下は大河を振り払い闇に近づいていく。

「馬鹿やめろ！」

大河が呼び止めるも月下は止まらない。

「わはぁはぁ自分から死にに行きよったわい！」

とキリコは嬉しそうに笑う。

「うるさい！！自分の孫だろうがクソ！」

闇がこく大河は月下に近づくことができない。

月下は闇の柱とかしたヒカリの前までくると自分の血を両手に付け床に魔法陣を描く。

「まにあってくれ」

とバンと魔法陣の上に両手をついた、魔法陣が光だし闇の柱を包み込む。

「帰ってこいヒカリ！！」

王は立ち上がり。

「何が起きているのだ、月下がこの会場にいるのか！！」

ピク！！

『何？誰かが私を呼んでいる・・・』

「ヒカリちゃん、ヒカリちゃんどうしたの？」

『あなたは誰？』

ヒカリは顔を上げるとそこには幼い頃のヒカリと少年がいた。

「あのねヒカリね・・・お母さんが居なくなっちゃたのどうしたらいいか解らないの・・・」

幼いヒカ리는暗い顔をしている今にも泣き出しそうだ。

『あれはお母さんが無くなったばかりの頃の私、あの首に欠けている鳥のネックレスお母さんに貰ったやつだ知らないうちに何処かにいっちゃたんだっけ』

「そうなんだ・・・  
お母さん天国に行っちゃったんだね僕の母上と一緒にだ」

「えっそうなの？」

「だからヒカリちゃんは泣いてるんだね」

「違う！！ヒカリ泣いてなんかないよ泣いてなんか・・・」

少年は幼いヒカ리를愛おしく見つめながら

「大丈夫お母さんはヒカリちゃんの側にいるよ君は一人じゃない・・・  
どうすればいいか聞いたねこう言う時は泣くんだよ」

と少年は優しく幼いヒカりに言う。

幼いヒカ리는母の死を受け入れられず泣いてしまったら母の死を認めてしまうことになるかと泣くことができないでいた。

ヒカリの瞳から涙が溢れ落ちる。

「ううわーん」

幼いヒカ리는少年にしがみ付き泣きじゃくる。

『お母さんが亡くなったばかりで泣いたらお母さんが帰って来ないような気がして泣くのを我慢してて、泣いたら楽になったのよね。

私は一人じゃない、いつもお母さんと一緒だと思うとどんなことでも頑張れるようになったんだっけ……

そっか私は一人じゃなかったいつもここにお母さんがいる……』

ヒカ리는自分の胸に手をあてる。

「ヒクヒク」

大泣きし少し落ち着いた幼いヒカ리가顔を上げる。

「そういえばお兄ちゃん名前は？」

『えっ！この子誰か知らないでしがみ付いて泣いてたの？我ながら無防備な子ね……』

自分の天然さにヒカ리는ガッカリする。

それを聞き少年は

「僕の名前は……」

と少年の唇が動くが声が聞こえない。

少年と幼いヒカ리의姿は消えていく

『あっ！待って！』

ヒカ리가呼び止めるが消えてしまう。



スーハァとヒカリは深呼吸する。

『そっか私は一人じゃなかったんだ私にはお母さんがついている、私は一人じゃないもっともっと強くなれる！！待っててねジン今行くよ！！』

とヒカリが言うと闇が崩れ落ちる。

『さあ目を開けてヒカリ！！』

ヒカリが目を覚ますと目の前に見慣れた形のペンダントトップが目に入る、あの鳥の形のペンダントトップだ。

『あっこれ私のネックレス』

と思った時だった。

「大丈夫かヒカリ、よくやった」

と聞きなれない声がある。

『誰？』

ヒカリが目覚めたばかりでもうろうとしながら声のする方を見るとそこには王の顔があったそれも近い！！

「えーどういうこと！！」

ヒカリはパニックになる、まさに今王にお姫様抱っこをされていたのだ。

「嘘でしょ恐れ多い！！」

とヒカリは飛び降りる。

「もういいのか？」

王がヒカリに聞くが

「すみません、すみません」

とヒカリは王に誤っている。

「そう畏まるなヒカリ、お前は今まさにこの国の救世主になったのだぞ」

ヒカリの様子を見て王が言う。

「えっ！！滅相もないです！！」

とヒカリはブンブン両手を振り否定する。

「月下！！」

「うあうあー！！」

大河の聲がし叫び声が聞こえる。

ヒカリが聲がする方を見ると、月下が血を流し叫びながら苦痛に耐えるあまり床に自分の体を打ち付け転がっている。

「月下！！」

ヒカリが月下に駆け寄ろうとすると王が遮る。

「誰かそのものを封印の間へ、黒龍が暴れ出す前に」

と王が言うが誰も黒龍を恐れ動こうとはしない。

「くっ、それでもユーリスの兵か！！」

と王は激怒する。

その様子を見ていたキリコの側近の女官の一人が王に近づいてくる。

「太下わたくしめが参ります。」

「そなたは？」

「申し遅れました私豹 恋華（ヒョウ レンカ）と申します。私が本当のキリコでございます」

「えっ！」

とヒカリは驚くが王の表情は動かない知っていたかのようだ。

恋華はとても色白できゃしゃな体つきをしている髪が肩までありとても美しいか弱いお姫様のようだった。

「ではあの者は？影だと」

「はい、王を欺いたことお許し下さい」

「許そうキリコ、黒龍を早く封印の間へ」

「はい太下、お許し頂けたこと有りがたき幸せ、あなたの期待に添える働きをいたしましょう」

と言うと恋華は月下に近づいて行く、月下を押しえつけていた大河が恋華に気づく。

「お前は恋華？！なぜここに」

「それは後で」

と言うと恋華は月下の額に手をあて何か呟くと月下の動きが止まる。

「お！！ありがたい！」

「急ぎましょう大河長くは持ちません」

「ああ！おいそこのヘタレども女に負けて悔しくないのか！！運ぶの手伝え」

と大河が言うと言りとプライドを傷つけられた兵士の何人かが慌て恐る恐る動き月下を運ぶ。

「相変わらず優しいのね大河」

と恋華が意味深なことを言う。

「何か言ったか？」

月下に気を取られていた大河は聞いていなかったようだ。

「いえ何も、行きましょ大河時間がないわ！！」

「ああ」

大河達は月下を連れ部屋を出て行く。

「私も！」

とヒカリが着いて行こうとすると王が

「待てヒカリ、お前にはまだ仕事が残っている」

「えっ!？」

「誰かヒカリをジンの所へ! ヒカリ、ジンを頼む彼もこの国の行く末に必要な男だ死で貰っては困る  
月下は大河に任せお前はジンを助けてくれ頼んだぞヒカリ!!」

「は、はい!!」

と言うとヒカリは道案内の兵士に着いて行く。

「ここですどうぞ」

と兵士がヒカリを地下牢に案内する、そこは暗くとても肌寒いとうてい人がいるとは思えない場所だった。

『こんな所にジンの!』

「ここです」

と兵士が指差した柵の先にジンの姿があった、ジンは体は痩せ細り毛は抜け落ち弱りきっていた。

「な、何でジンをこんなところに酷すぎる！」

ジンの悲惨な姿を見てヒカリは怒りが込み上げ声が震える。

「仕方ないのです闇に犯された者を上にはお連れ出来ません、いつ闇が暴れだすか・・・  
食事は受け付けずこんなことに・・・申し訳ありません」

「いえ・・・」

兵士の言葉に言葉少なくヒカリが答える。

カンカンと足音が近づいてくる、振り向くと恋華がそこに立っていた。

「あなたは！？月下はどうなりました大丈夫ですか！！」

「ええ何とか暴走せず押さえ込むことが出来ました、でも当分は動けないかと・・・」

「そうですか・・・」

ヒカリは複雑な思いがした。

「ヒカリさん急ぎましょう彼が危ないわ」

恋華がジンの様態を見て言った。

「でもどうしたらいいのか？私分からなくて・・・」

「あなたはあの試練で夢をわたる力を手にいれたはず、彼を思い目を閉じるだけでいいのです  
そうすれば彼の心に入れるはず  
彼を闇から救い上げて下さいこれはあなたにしか出来ないことお願いしますヒカリさん」

「分かりました！！」

ヒカリはジンの側に行き瞳を閉じる。

『ジンは私を今まさに必要としてくれている私が存在している理由・・・  
ジン今迎えに行くから待ってて！！』

ヒカリはそのまま動かなくなった。

ヒカリは闇に落ちていくジンの闇は深い・・・

『ジン何処なの！！ジンー』

とヒカリが叫ぶが返事は返ってこない。

『ジンが反応しそうなことなんかないかなあ？』

とヒカリは少し考えた後

『ジンのチビ！！お子様！ジンちゃん』

と急に叫ぶ。

『ジンが自分が小さいの気にしてたみたいだから叫んで見たけどどうだろ？』

コツンとヒカリの頭に何かがぶつかる。

『いた！！』

『俺はチビじゃない』

『ジン！』

ヒカリの目の前にジンが現れる。

『気づいてくれたのね』

『最初から気づいてたさ、だがもう帰ってくれヒカリ迷惑なんだよ』

『どういう意味！？』

意味が理解できずヒカリはジンに聞き返す。

『オレはあっちの世界がいやになったんだ戻りたくないあんなところへは・・・』

とジンはヒカリの顔を見ないで言った。

『ジン！！みんな待ってるのよ』

『誰もオレなんか必要としていないさ！！必要とされたくもない、腐れきったこの世の中にオレは飽き飽きしてるんだもう戻ることはない！！』



とジンが感情をあらわにし言う、とても辛そうだなんなジンを見てヒカリは腹が立ってきた。

『ジン馬鹿なこと言わないで！！ムイさんはジンのためにどんだけ頑張るかプライドを捨ててまでジンのために思って月下に頭を下げて、あなたをジンを手助けしてくれて・・・』

ヒカリの瞳に涙が浮かぶ。

『ムイが・・・』

ジンの顔色が変わる。

『馬鹿な奴だこんなオレの為に・・・』

『本当にバカなのはジンだよ！！私もジンに帰って来て欲しいのジンお願い自分のことを要らない人間なんて言わないで・・・

私だってそんなに人の為に何が出来るって分けでもないけど笑顔でいることは出来るよ！！それだけでいいんだよそれだけで誰かをきっと知らないうちに幸せに出来る、ジンの笑顔に私は救われたわまた笑ってよジン今度は自分のために』

といい終わるとヒカリは目を閉じジンを抱きしめる。

『ヒカリ・・・』

ヒカリの意外な行動にジンはあっけにとられ毒気が抜ける。

『後はジン次第だよ・・・』

ジンもヒカリを抱き返す。

『帰ってもいいのかなぁオレ、沢山の人を犠牲にしお母様に疎まれ生きている価値がないと思っていたけど・・・』

『ジンの馬鹿！！ジンが生ちゃいけない人なら誰も生きて行けないわ自信を持ってジンあなたは私たちの光よ』

ヒカリの言葉を聞きジンが微笑む・・・。

『ありがとうヒカリ、オレ逃げないでもう少し頑張ってみるよムイや皆のために』

ぱあとヒカリとジンを暖かい光が包み闇が消えて行く。

ギュッ！

『えっ！！』

目を空けると裸のジンにヒカリは抱きつかれていた、ギュッと力一杯抱きしめられているせいで身動きが出来ない。

「ヒカリ？」

とジン

バサッとみかねた恋華が自分が着ていた着物を一枚脱ぎジンに掛ける。

「うん、あんたは？」

とジンが恋華を見て言う。

「早く離れなさい！！ヒカリさんからじゃないと彼女危ないわよ」

男の裸に免疫のないのと抱きつかれたことによりヒカ리는目を回していた、ワハハッハと意味不明なことを言っている。

「大丈夫かヒカリ！」

と慌ててジンがヒカ리를左右に振る。

「あーうん、大丈夫だから前閉めて・・・」

とヒカリは目をジンから逸らしながら遠慮がちに言う。

「あっ、すまん！！」

と自分の格好を見てジンが少し照れながら慌て着物を整える。

「獣の姿から元に戻ると服がないから不便だな」

と照れながら言う。

ジンの変わらない様子を見てヒカリはホットした。

「でここどこだ？」

ぐら！！急にジンは前にいたヒカリに倒れこんだ。

「ジン！！」

ヒカリは慌ててジンを受け止める。

「病み上がりは無茶するからですわ」

と恋華は繭を顰めながら言った。

「その人この方を診療所へ」

「ですが・・・」

と闇を恐れ尻込みする兵士に恋華が

「大丈夫もう闇はいません、早くしなさい！」

とか弱いお姫様に尻を叩かれ面食った兵士はジンを躊躇することなく担ぎ上げ階段を登って行く。

「ヒカリさんはこちらへ」

恋華の意外な姿を見てあっけにと取られていたヒカリは我に返り

「えっ！あっはい」

ヒカリは慌て立ち上がる。  
牢屋の奥の方に扉が見える。

「あれは封印の間です、あそこに月下がいます」

薄暗い中にある古びた扉には、何か魔法陣が描かれ頑丈そうな鍵がついている。

「私に出来ることは？」

真剣な表情になりヒカリが聞く。

「何もありません、ただ祈って下さい彼が帰ってくることを」

と言うと恋華は静かに目を閉じる、何も出来ないことを態度で示すかのように・・・。

「月下・・・中に入ってもいいんですか？」

「かまいませんが、あなたが月下を受け入れられるのであれば・・・  
生半可な気持ちで入るのはお辞め下さい、これ以上あの方を苦しめるのは私の本意ではありません」

「どういう意味ですか？」

「私の口からはこれ以上は・・・」

と恋華は言葉を濁す。

ヒカリはどうすべきか悩む、月下のことは心配だが恋華の言葉が気にかかる。

「私中へ入ります、月下が心配だしこんな所で一人にしておけない」

さっきのジンの酷い姿がヒカリの頭に浮かぶ、ヒカリは扉の前に立つその様子を見た恋華はヒカリに鍵を手渡した。

「これを」

「ありがとうございます」

「お強いんですねヒカリさんは・・・月下のこと頼みます」

「はい」

と言うとヒカリは扉を開け中に入る。

中は灯りが灯っているらしく少し外よ明るい。

「月下!？」

生臭い嫌な匂いがする。

「クックサイ!？何の匂いだろう？」

ヒカリは怯まず奥へと進んでいく奥に進む度に匂いが強くなる鼻がもげそうだ。

グオーーーーーン!!

と人とは思えないものの声がする。

恐る恐る声の主を見ると鎖に繋がれ雄叫びを上げる黒い化物がいた、肌はゴツゴツし爬虫類のよ

う口は大きく尖った牙が見える口からポタポタと唾液が落ちている、体が大きく全体を把握することは難しい悪臭はこの大きな黒い化物から臭っているようだった。  
ヒカリは悪臭に耐えかね鼻を押さえる。

「これは何？生き物なの」

「ヒカリ何してるんだ！！」

「大河！」

中にいたらしく大河がヒカリに近づいてくる

「月下は！月下どこなの？」

「そっそれは・・・」

と言葉に詰まる、そんな大河を見てヒカリは

「もしかしてこれが月下なの・・・」

ヒカリの様子を見て隠しとうせないと思った大河は

「そうだ、これが月下だ黒龍を押さえることが出来ずこんな姿に・・・  
今はもう俺たちがしてやれることはない黒龍が収まるのを待つだけだ、行こうヒカリ月下もこれ以上お前にこの姿を見られたくないはずだ」

「でも、おえ」

ヒカリは悪臭に耐えかね吐いてしまう。

「はあはあいやこんなのいや！！なんなのこんなの酷すぎるこれじゃ」

混乱しヒカリは思ったことを思わず口にする。

「ヒカリ！！これ以上言うな月下が悲しむ」

ハッヒカリは我に変える。

「ご、ごめんなさい・・・」

「行こうヒカリ月下のためにも」

今度はヒカリは反論せず大河に連れられ部屋を出ていく。

うお——

と黒龍が悲しい叫び声を上げる。

「なぜヒカリを連れてきた恋華！！」

恋華はヒカリ達がいなくなると姿を現した。

「怨めばいいわ私をそして私を殺しなさい月下」

「言われずとも恨んでやるとも、殺してやる！！」

と怒りを黒龍は口にするると恋華に襲いかかろうとするが鎖に繋がれとどかない。

「くそう！忌々しい女め」

鎖を引きちぎろうともがく音だけが地下牢に響いていた。

「お、おえ・・・」



と嗚咽を漏らしながらヒカリは大河に支えられ歩く、自然と涙が溢れ落ちる。  
悔しかった月下を受け入れられなかった自分に自分の心がいなさに

『大河に止められなければ私は何を言うつもりだったの・・・』

そのことを考えると涙が止まらない。

「仕方ない急にあんな姿の月下を見たんだ当然の反応だ、自分を攻めるなそれよりこれからのことを考えろ、お前なら出来るはずだヒカリ」

『私に出来ること・・・』

ヒカリは考えるが浮かんでこない。

大河は人目につかない適当な所にヒカリを座らすと

「ヒカリ今日は良く頑張ったな偉かったぞ！！  
今日はいろんなことがありすぎた少し混乱してるんだ少し休もうな・・・」

子供をあやすように言うとヒカリの頭をなでる、大河の優しい言葉が傷ついた心に沁みる。  
大河はヒカリの隣に座り空を見上げると

「今日は星が綺麗だなあ・・・明日はヒカリも見れるといいな」

「うん」

とヒカリはなんとか返事を返した。